

<論文>

乳幼児とのふれ合い体験についての一考察 —大学生の省察資料による検討—

岡野雅子 信州大学教育学部生活科学教育講座

Observations of Experience in Relating to Young Children —Evaluations Based on Reflections of University Students—

OKANO Masako: Living Science, Faculty of Education, Shinshu University

In this study, I considered the “experience of relating to young children” at both the beginning and the end of the “Practice of Child Study” class period, using reflections students had. The first report reflected on the current situation where there is a lack of interaction between the generations. Students described “confusion,” naive “surprise” and “enjoyment” when they first met young children, and their motivation to learn more about children was raised as a result. The second report showed that the students have taken note of the importance of observing their surroundings from the viewpoints of the children, and they could further their understanding by comparing the behaviors of children with their own knowledge.

【キーワード】 ふれ合い体験 乳幼児 省察 大学生

1. 目的

わが国のかつての家庭生活は、さまざまな世代がともに暮らし、きょうだい数は現在よりも一般的に多かった。子どもたちは、年齢の離れたきょうだいとふれ合うなかで、その発達過程を理解したり適切な育児行動を身に付ける機会を得ていたと思われる。しかし近年では家族員数は減少し、児童・生徒にとって年齢の離れた乳幼児との交流は高齢者との交流よりも乏しい傾向にある(岡野 1997)。次世代を担う子どもを健全に育てることは、市民として果たすべき責務の一つであり、その資質を身に付けることは重要な教育課題の一つであるが、上記のような変化を受けてこの教育課題の遂行は、学校教育で意図的に取り組むべき事項となってきている。『高等学校学習指導要領』(文部省 1999, p.131)では、家庭科の内容の中に「乳幼児の心身の発達と生活、親の役割と保育及び子どもの福祉について理解させ、子どもを生み育てることの意義を考えさせるとともに、子どもの健全な発達のために、親や家族及び社会の果たす役割が重要であることを認識させる。」と記されている。また、中央教育審議会報告『少子化と教育について』(文部省 2000)では、学校教育において「子育ての大切さ、親の役割、更には地域の一員としての近隣の子どもののかかわり方等について考えさせる『子育て理解教育』という視点を持って、これらの学習を教育課程全

体の中で適切に位置づけ、教育活動の展開を図ることが求められる。」と指摘している。

学校教育における学習を効果的に遂行するためには、生徒の実態を把握することは必要不可欠である。伊藤・武藤(1987)は中学・高校の女子生徒の場合に、子どもに対する興味・関心の高い生徒は子どもに対して明朗で扱いやすく、敏感で健康な、無邪気なイメージが強いことを見いだしている。また、岡野(2003a)は女子大学生を対象に調査を行い、子どもに対するイメージは身近かな家族員や友人との間に共感的であると同時に指導性を伴う人間関係を構築していることが、良好な子どもイメージの形成と深く関連していることを見いだしている。

保育教育の重要性が高まる中で、乳幼児と直接ふれ合う保育体験学習が家庭科保育領域のカリキュラムとして取り入れられるようになった。しかし、大路・松村(1998)はその効果とともに問題点もあることを指摘している。また、藤後(2001)は高校生について、保育体験学習前の赤ちゃんイメージは肯定的で幼児イメージは否定的が多いが、体験後には赤ちゃんイメージは肯定的と否定的の両方が増加し、幼児イメージは否定的が減り肯定的が増加したと報告している。岡野(2003b)による女子学生と幼稚園児母親の子どもイメージを比較した研究では、学生は子どもを「かわいい」あるいは「うるさい」としてその一側面のみを捉える傾向があるのに対して、幼児をもつ母親は様々な側面から子どもを捉えていた。また、中田・松村(1999)は、乳幼児との接触体験は生徒の情意面の効果は認められるものの子どもの発達に対する理解については乏しいことから、保育教材としてのコンピュータによる映像教材の開発について検討を行っている。さらに、藤後(2004)は家庭科教育の保育領域における研究動向を概観し、保育目標や保育教育の内容、指導法の再検討、発達的な視点に基づいた系統的カリキュラムの開発と効果測定を今後の留意点として挙げるとともに、効果測定 of 縦断的研究の必要性を指摘している。

これらの先行研究を踏まえて、本研究では大学生の乳幼児とのふれ合い体験が子ども理解に及ぼす影響について実証的に検討することを目的とする。具体的には、信州大学教育学部生活科学教育講座ライフプランニング教育分野の保育学領域の選択科目である『保育実践論』の履修学生を対象として、授業期間当初に実施した乳幼児とのふれ合い体験(1回目、4月中旬に実施)と授業期間の終期に実施した同じ乳幼児とのふれ合い体験(2回目、7月中旬に実施)における資料を基にして検討を行う。それにより、それまで日常的に乳幼児とふれ合う経験をほとんど持たない大学生が、乳幼児と直接かかわることによって、何に気づき、どのような発見をしたのか、それは子どもという存在に対する理解の深まりに対してどのように作用するのか等についての考察を試みたい。そして、今日的要請である保育教育の有効性についての示唆を得たいと考える。

2. 方法

2.1 対象学生

信州大学教育学部の開講科目『保育実践論』を履修した学生である。平成14年度から16年度の3年間は授業内容がほぼ同じであり、その間に18名(男子1名、女子17名)が履

修した。彼ら彼女らは2年生～4年生で19歳～23歳である。

2.2 手続き

『保育実践論』は前期1コマ1単位であり、授業内容は次のようである。

1回目：イントロダクション
2回目：乳幼児とのふれ合い体験（1回目）
3回目：ふれ合い体験(1回目)についてのレポートを資料として討論
4回目～13回目： 保育という営みについて（講義）……『幼稚園教育要領』および『保育所保育指針』を資料とする。 保育実践事例による討論……友定啓子他著『子どもの心を支える』勁草書房(1999)、文部省幼稚園教育指導資料(1995)等を資料とする。 保育関係機関の見学……幼稚園、保育所、子育て支援センター、乳児院、児童センター（学童保育所）等を見学し、許可があれば乳幼児・児童とふれあい、遊ぶ。（各年度により学生の希望をもとにして2～3ヶ所を選び見学した。）
14回目：乳幼児とのふれ合い体験（2回目）
15回目：ふれ合い体験（2回目）についてのレポートを資料として討論および全体討論

「ふれ合い体験」の実施後に自己の体験を省察するレポートを課し、直ちに（翌日までに）提出するように指導した。レポートの項目は、①自分自身について（戸惑ったこと、驚いたこと、嬉しかったこと、楽しかったこと、困ったこと）、②気づきや新たな発見について、である。学生の行動はVTRで記録しレポートの内容の裏付けとした。

「保育実践事例による討論」では、保育場面について「1.子どもの心情を考える」「2.保育者の心情を考える」の課題について討論を行った。また、「保育関係機関の見学」は見学後にレポートを課した。

本報告では、第2回目授業時および第14回目授業時に実施した「ふれ合い体験」についての学生の省察資料を基にして検討を試みる。

ところで、本学教育学部は松本市に附属幼稚園を有しているが、教育学部所在地の長野市からは離れているため、「ふれ合い体験」の場として活用することは実際上難しい。

カナダの保育教育では、小学校・中学校で地域の乳児を持つ母子の協力を得て、一人の乳児を生まれて間もない頃から継続的に学校に招くという方法を取り入れている（読売新聞記事 2001.9.8）。そこで、本授業における「ふれ合い体験」は、この方法を参考にした。

「ふれ合い体験」の場所は、教育学部西校舎1階ホールである。通常はテーブルと椅子などが置いてあるが、「ふれ合い体験」時には隅に片付けて広く遊べるようにした。また、乳児がいる場合にはシートを敷いた。

2.3 乳幼児および母親

授業担当者（筆者）が担当している市民開放授業である他の授業科目の受講生であるM氏に協力を依頼した。また、学生の知人や先輩等のネットワークにより就学前乳幼児をもつ母親を捜した。協力依頼の際には母親に本授業の「ふれ合い体験」の趣旨を説明した。「ふれ合い体験」には少ない時で2組、多い時には5組の母子が参加した。子どもは生後6ヶ月児から5歳児までであるが、幼稚園・保育園（所）就園前の1歳児、2歳児が多かった。1回目の「ふれ合い体験」場面に協力してくれた母子に2回目の場面にも協力を要請した。したがって、同一年度の2回の「ふれ合い体験」は原則として同じ母子である。ただし、3年

間（6回）のうち、1組が2年間参加しそれ以外は1年間（2回）の参加であり、年度により母子は異なっている。

3. 結果と考察

3.1 乳幼児とのふれ合い体験についての事前調査

小・中・高校における「保育体験学習」の有無、および現在乳幼児とふれ合う機会の有無についての事前調査結果は表1の通りである。

学校教育における保育体験学習は、中学校が多く過半数を超えていて、家庭科教育の授業内容として幼稚園・保育園(所)を訪問し、幼児を観察したり一緒に遊ぶ活動が多い。小学校では行事の際に幼稚園児・保育園(所)児との交流を行うなどの活動が行われるようになってきている。しかし、高等学校では保育体験学習は少ないことがうかがえる。平成11年3月告示の『高等学校学習指導要領』では内容の取扱いについて「学校や地域の実態等に応じて、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、幼稚園や保育所等の乳幼児、近隣の小学校低学年の児童等との触れ合いや交流をもつよう努めること。」と明記されている(文部省1999,p.136)が、2002年秋に行った長野県家庭科教員を対象とした調査によれば、「保育体験学習の教育効果は大きい」(92%)と捉えているものの「その準備はたいへんだ」(83%)という思いがあり、保育体験学習を行わない(行えない)理由として「時間が取れない」「生徒数が多く対応できない」「近くに保育施設がない」等を挙げている(岡野他,2005)。

一方、現在乳幼児とふれ合う機会は「まったく無し」「ほとんど無し」が計11人で、過半数の学生がその機会に乏しいことがわかる。ふれ合う機会が「有り」の場合の頻度を見ると「月1～2回程度」4人「週1～2回程度」3人であり、決して日常生活レベルでのかかわりとはいえないようである。

表1 乳幼児とのふれ合い体験についての事前調査

表1-1 小・中・高における「保育体験学習」の有無(n=18)

校種	有無	人数(%)
小学校	有り	3(16.7)
	無し	15(83.3)
中学校	有り	11(61.1)
	無し	7(38.9)
高等学校	有り	1(5.6)
	無し	17(94.4)

表1-2 現在乳幼児とふれ合う機会の有無(n=18)

無し		有り	
まったく無し	ほとんど無し	月1～2回程度	週1～2回程度
6人	5人	4人	3人
11人(61.1%)		7人(38.9%)	

「保育体験学習」有りの場合

- 小学校：産休の担任教師が赤ん坊を学校に連れて来た。
運動会で次年度入学予定幼児の誘導係をした。
「姉妹学級」という行事だったと思う。
- 中学校：家庭科の授業で保育園・幼稚園に行った。(8人)
職場体験学習で保育園に行った。(2人)
ボランティア活動を行った。(1人)
- 高等学校：家庭科の授業で保育園に行った。

3.2 第1回乳幼児とのふれ合い体験(4月中旬)についての省察

本資料は18事例と少数であるので、事例ごとに個別に第1回目と第2回目のふれ合い体験についての省察資料を検討し、その変容過程について考察する方法が適当であると思わ

れる。しかし、各事例を詳細に取り上げることは紙面の制約上難しい。そこで今回は同じ属性を持つ18名を一つの集団として捉え、2回にわたる省察資料について項目ごとに典型的記述を取り上げて、ふれ合い体験の効果を検討することにした。

(1) 自分自身について

1) 戸惑ったこと

- ・私は幼児とあまりかかわったことがなく、特にS君の行動は理解するのが難しく、戸惑った。また、赤ちゃんを抱いたことがあまりないので、どう触れているのかわからなかった。[学生 No.4 : 保育体験学習は中学校、現在乳幼児とふれ合う機会は無し]
- ・どんなことで喜ぶのか、どんな遊びがしたいのか、どんなことまでできるのかということがわからなかった。[学生 No.8 : 保育体験学習は無し、現在乳幼児とふれ合う機会は無し]
- ・抱き上げたときにあまりに軟らかく不安定で、どこを持ったらいいのかわからず戸惑った。[学生 No.13 : 保育体験学習は無し、現在乳幼児とふれ合う機会は無し]
- ・初めて会う人に突然接近されたら泣き出してしまわないかと心配した。[学生 No.14 : 保育体験学習は無し、現在乳幼児とふれ合う機会は無し]
- ・1歳くらいの子ともと接する機会がなかったので、自分がどうしていればいいのかわからなかった。[学生 No.18 : 保育体験学習は中学校、現在乳幼児とふれ合う機会は無し]
- ・どんなことをやったら子どもが喜ぶのかを探るのに戸惑った。[学生 No.7 : 保育体験学習は中学校、現在乳幼児とふれ合う機会は1-2回程度/週]

2) 驚いたこと

- ・A君くらいの年齢の子どもはもっとお喋りをするのかと思っていたけれど、あまり話さないことに驚いた。[No.2 : 中、無し]
- ・まわりに対する好奇心の強さに驚いた。[No.13 : 無し、無し]
- ・じーっと学生のことを見つめていて、まだ言葉には出さないけれど頭の中ではいろいろと思っているのだろうなと思った。[No.14 : 無し、無し]
- ・1歳前の子どもでも音の出る缶を振る、転がす、缶を立てて手で叩くなど遊びを創造することに驚いた。そして満足げな顔をしていた。2歳8ヶ月のK君は校舎の奥の方に行くに「暗い」、中庭越しに廊下を人が通るのを見て「あつっ」などと言い、環境からたくさんのかんじを発見していると思った。[No.16 : 小、無し]
- ・K君とY子ちゃんのはほぼ同じ時期に生まれたのに、発達の違いがあってびっくりした。自分で移動できるかできないかによって遊びの範囲や内容もだいぶ変わると思った。[No.6 : 小・中、1-2/M]
- ・笑わせたらすぐに笑ってくれたらと思っていたが、意外にも無表情だったので驚いた。[No.7 : 中、1-2/W]
- ・子どもの個人差に驚いた。また、頭をぶついたりしても全然立かないことに驚いた。[No.10 : 中、1-2/M]

3) 嬉しかったこと

- ・クレヨンを私に渡そうとしてくれたり、S君が最後に別れたくないと嫌がったこと。[No.2 : 中、無し]
- ・私の膝や手をつかんだり触ろうとする動作をしてくれたとき嬉しかった。[No.13 : 無し、無し]
- ・「ねえ僕を描いて」とせがんでくれたり、「K君のお耳はどこ?」「ここだよ」と教えてくれて、会話が成立したことが嬉しかった。[No.14 : 無し、無し]
- ・私と目があって笑ってくれたときに嬉しかった。[No.18 : 中、無し]
- ・K君が手を出して抱っこして欲しい意思を示してくれたこと。[No.6 : 小・中、1-2/M]
- ・笑ってくれたときは、もうかわいくて仕方がなかった。[No.7 : 中、1-2/W]
- ・笑顔を見せて喜んでくれるだけで、こちらも嬉しくなれた。近寄ってきてくれたり、つかまってくれたりしたときには、安心してきているのかなと思うと嬉しくなった。[No.10 : 中、1-2/M]

4) 楽しかったこと

- ・自分が子どもに戻ったように素直になれるし、とにかく楽しい。[No.3 : 中、無し]
- ・子どもたちはとてもかわいく、行動を観察しているだけで楽しかった。子どもと遊ぶには、先ず自分も子どもの目線になり、一緒に楽しむことが大切だと思った。[No.4 : 中、無し]
- ・想像力が豊かで私には思いつかなかったことを突然言うので、驚いたし楽しかった。[No.14 : 無し、無し]
- ・幼い子どもの目が本当にたくさんものを見て、感じているのだということを実感した。いつもの場所(校舎)なのにこちらも発見が多く、楽しかった。[No.16 : 小、無し]
- ・いろいろなものに興味を持ち予想外の動きをする場面の一つ一つが面白く楽しかった。[No.10 : 中、1-2/M]
- ・子どもの反応を見ているだけで十分に楽しかった。[No.12♂ : 高、1-2/W]

5) 困ったこと

- ・赤ちゃんを抱かせてくれた時に、どのように抱いたらよいかわからなかった。[No.13：無し、無し]
- ・乳児の場合慣れないこともあって、少ないおもちゃでどう遊べるか少し頭をひねった。[No.16：小、無し]
- ・どんな遊びをしたら喜ぶのかわからなくて困った。[No.6：小・中、1-2/M]
- ・子どもが思うように反応してくれなくて困った。K君が泣いてしまった時に、どのようになだめようかと思っ
た。[No.7：中、1-2/W]
- ・何を言っているのか分からなくて、適当に「そーなんだあ！」と言ったけれど、子どもにとってどうすることが
一番良いのかわからなかった。[No.10：中、1-2/M]
- ・人見知りしている子どもたちとどうやって仲良くなれるのかということに困った。[No.17：無し、1-2/M]

(2) 気づきや新たな発見について

- ・反省ばかり残った。どう接していいかわからず、全然自分から働きかけることができなかった。最後にお別れ
の時に立ったまま握手をしてしまい、子どもと同じ視点でという一番基本的なことができなかった。次回はおも
っと積極的にかわりをもちたいと思った。[No.2：中、無し]
- ・1歳半と5歳とで発達段階が異なると行動がまったく違ってくるのがわかった。まだまだ子どもの行動が理
解できないので、どういう意味があって行動しているのか知りたいと思った。また、常にそばで見守っている
母親の存在の大切さを感じた。子どもの目線に立つと普段気づかないものが見えてきて楽しかった。子どもの
ことを理解し発達を助けていけるようになりたいと思った。[No.4：中、無し]
- ・子どもと遊ぶというのは、子どもの遊びにつき合うことと、遊びを提供することの2つがあると思うので、次
回には後者ができるようになりたい。[No.8：無し、無し]
- ・思ったより小さいと感じたが、抱いたときにずっしりとした重みを感じられ、しっかりと“いのち”がここ
に存在していて、これからどんどん大きく豊かに成長していくのだろうなと思った。お母さんの子どもを見る温
かい視線が印象的だった。普段お母さんがどのように赤ちゃんに接しているかも、赤ちゃんのお母さんへの反
応やまなざしからわかった。お母さんの存在が、赤ちゃんにとって活動の基盤になるようなとても重要なもの
であることがわかった。[No.13：無し、無し]
- ・同じ年齢でも興味の対象がそれぞれで、性格も違うんだということを実感した。5人の子どもに共通している
ことは、不安になるとお母さんを捜し、そばに行くことと安心した表情を見せることだ。年齢にあったおもちゃが
必要だと感じたが、ものをたくさん与えればいいのかではないと思った。[No.14：無し、無し]
- ・子どもの目線に立つことは、遊びを提供する上でとても大切なことだと感じるとともに、保育という
のはただ上手に遊ばせようというのではなく、上手く表現できない子どもの気持ちをいかに察するかが大切であり、
難しいなあと感じた。[No.16：小、無し]
- ・子どもにとって1年の差はとても大きいと思った。また、親は子どもを無条件で受け容れることのできる存在
であるべきだと思った。[No.18：中、無し]
- ・子どもを知ることは人間を知ることだと思った。子どもの行動は矛盾していてわからないものと諦めないで、
勉強していくとつかめてくるものではないかなと感じることができた。[No.7：中、1-2/W]
- ・子どもは小さくても様々な方向に注意を向けていて、何事にも敏感だなあと思った。[No.10：中、1-2/M]
- ・しゃべる段階の前の子どもに対する接し方が、まだまだだと思った。ほとんど通じなかったりもするだろうが、
やはり語りかけていかないといけない。[No.12♂：高、1-2/W]

3.3 第2回乳幼児とのふれ合い体験（7月中旬）についての省察

(1) 自分自身について

1) 戸惑ったこと

- ・この授業で保育園に行ったり幼児とふれ合う機会があり、接し方も慣れてきて気軽に話しかけ接することが出
来るようになったと思う。ただ、幼児と乳児では理解力や表現力も違うので、予想外の反応が来たり逆に反応
がないと「どうしよう…」と思った。[No.10：中、1-2/M]
- ・子どもと遊ぼうという思いと、子ども自身の遊びを邪魔せずにある程度は手を出さずに好きなようにやること
を見ていた方が良いのかなという思いの、2つの思いがあった。[No.11：中、1-2/M]
- ・前回よりも何となく接し方が分かったので上手く実践できるかと思っていただけ、そうでもなかった。[No.12
♂：高、1-2/W]

2) 驚いたこと

- ・S君が行動や表情など見た目でもわかる位に、大きく成長していた。[No.3：中、無し]
- ・椅子をまたいで遊んでいた時に、椅子の向きを変えたら不満げな顔をして元に戻してと言うような動作をした。
1歳半の子どもでも自分なりのこだわりがあり、意思表示ができることに驚いた。[No.4：中、無し]

- ・一人ひとりに個性があることに驚き、それが前回と変わっていないことにも驚いた。[No.14：無し、無し]
- ・大泣きしているSe君(6ヶ月児)にM君(1歳9ヶ月児)が近寄り、心配そうに見つめて「よしよし」をしたときには驚いたというか、もうそんなことができるんだと感動してしまった。[No.10：中、1-2/M]

3) 嬉しかったこと

- ・人見知りか激しいN子ちゃんが、私の手を掴んでくれたことがとても嬉しかった。[No.3：中、無し]
- ・子どもの真似をすと喜んで、「これをやって」と頼まれたりしたとき。[No.8：無し、無し]
- ・「何かあるよ」と自分で発見したことを教えるに来てくれたことがとても嬉しかった。[No.13：無し、無し]
- ・こちらからの働きかけに笑顔で応じてくれたとき。[No.7：中、1-2/W]

4) 楽しかったこと

- ・椅子や雪かきなど私たちには一つの働きか分らないものを、子どもは様々な遊びにするのを見ていると頭が柔らかくなるし、感心させられた。[No.3：中、無し]
- ・やっぱりかわいい。一緒にいて楽しかった。[No.8：無し、無し]
- ・学生たちのかかわり方によって子どもの反応が変わると分かって楽しかった。信頼関係を築くのは本当は簡単なかもしれない。私が保育者だったら、子どもの個性を活かした保育をやるうと考えたりすると楽しかった。[No.14：無し、無し]
- ・些細なやりとりから遊びが生まれ、楽しさを共有できたときはとても楽しかった。[No.10：中、1-2/M]

5) 困ったこと

- ・かかわり方はだいぶわかってきたので、子どもの遊びを邪魔しないように心がけていたけれど、もう少し自分から働きかけても良かったかなと思った。[No.2：中、無し]
- ・本気で蹴ったりパンチをしてくる時、どの程度まで遊びの範囲で認めて良いのか困った。[No.4：中、無し]
- ・突然泣き出した時はどうあやせばいいのかと困った。しかし、前回ほどの戸惑いはなかった。[No.7：中、1-2/W]
- ・近づいて話しかけると、何も言わずに去って行ってお母さんの元に行ってしまった。どのようにすれば心を許し開いてくれるかなと思った。[No.10：中、1-2/M]

(2) 気づきや新たな発見について

- ・S君を見ていると、親や周りの人々の愛情をたくさんもらって、とても良い環境の中ですくすくと成長しているなあと思った。お母さんはいつも優しく温かい笑顔でS君を見ている。S君のようにたくさんの愛情を受けている子は、私たち学生に対しても近づいてくるし、こちら側から近づいても怖がったりしない。子どもが生きている「環境」の大切さをとても考えさせられた。[No.3：中、無し]
- ・やっぱり子どもはかわいいなあと思った。みんな両親に愛され大切に育てられているのだと感じた。乳児院見学の時には子どもはどこか不安げでいつもそばに誰かいないと泣いて探し回り、ずっと保育士に抱かれていた。それとは逆にS君は自分でどんどん母親のもとを離れて新しいことをしていた。母子の間に信頼関係が成り立っているからだと思う。[No.4：中、無し]
- ・授業の「保育実践事例」で学んだように、子どもの遊びのサポートが出来ればいいと思ったが、実際は簡単なものではないと思った。様々な年齢の子どもがいたので、同じ対応ではいけないということは分かっているが、難しい。[No.8：無し、無し]
- ・子ども自身の興味の向くところに付き添っていくのは大切であるが、それだけではダメで、プラスして新しいアイデアでどんどん子どもが夢中になっていくように引っ張っていくことが重要であることに気づいた。それが環境設定だと思った。[No.13：無し、無し]
- ・お母さんの姿から学ぼうと思ったが、お互いの関係が違うので真似をしたところでダメだということがすぐに分かった。頭で考えるばかりで、実際に行動に移そうとしない自分の姿に気づかされた。自分から行動に移さないことには、子どもたちはついてきてくれるはずもないのだ。今まで主体的に子どもたちとかわる機会があまりにも少なく、とても恥ずかしく思った。[No.18：中、無し]
- ・1年の差でこれほど発達の違いがあるのかと思うと、乳幼児の発達は本当に速いと思う。お母さんたちはみな子育てを楽しんでいる印象を受けた。子どもが自分の所へ向かってくる姿を見るお母さんの顔は、とても生き生きとしていた。最初子どもたちに会った時はあやしても笑ってくれなくて緊張してしまっただけで、子どもの反応が返ってくるまでいろいろ試してみる必要があると思った。[No.6：小・中、1-2/M]
- ・子どもと接していると、自分自身が普段よりも明るく優しくなってくるのを感じる。「どうしたらこの子は笑うかな」「どうしたら泣きやむかな」などいろいろなことを考えるようになり、必然的に明るくやさしく接している自分に気づく。子どもは体全体で一生懸命生きているという感じがして、そんな子どもを丸ごと理解しようと思うので、私自身も一生懸命になってくるんだらうなと感じた。ますます子どもが好きになるとともに、自分の未熟さも実感した。[No.7：中、1-2/W]
- ・授業で学んだ「愛着行動」をどの子を見てもまざまざと見ることが出来た。今までは乳幼児が母親の方をいつも

気にしたり、母親の方へ向かっていくと「やっぱりお母さんが好きなんだね」と思っていたが、その行動はその子がこれから自立していくうえでとても大切な行動であることを知った今では、築いてきた母子関係に非常に意味があり、どの親子もきちんとそれができていることに安心した。また、視線が同じだからか、子どもは他の子どもの動きにとっても敏感だ。子ども一人ひとりを見た目はもちろん、性格や発達状況もそれぞれ違っていた。一人ひとりの特性をしっかりと理解しなくてはよい保育は出来ないと思った。そのためには直接コミュニケーションをできるだけとって、理解をし、その子らに見合った対応を臨機応変にしていけることが大切だと感じた。[No.10：中、1-2/M]

- ・M君(1歳9ヶ月児)のようにモノとコトバをつなげられる子と、そうでない子では、遊び方や接し方が異なってくると思った。子どもは周りのいろいろな物に対して敏感に反応し、興味を示す。物事に対して深くのめり込み真っ直ぐに向かっていくと感じた。乳幼児と遊んでいるとたくさんの新しい発見ができる。それは乳幼児を知ることで、自分を知ることに繋がっていくことのようにも思えた。[No.11：中、1-2/M]

3.5 考察

小・中・高校における「保育体験学習」の有無により省察に相違があるとは認められず、したがって今回の資料を見る限りにおいては「保育体験学習」が影響を及ぼしているとは言いがたいようである。それは「保育体験学習」が幼稚園児・保育所児との交流であったのに対して、今回は主に就園前の1～2歳児であることに因るのではなかろうか。一方、現在乳幼児とふれ合う機会の有無については、「有り」の学生は「無し」の学生に比べて1回目の戸惑いや驚きの記述が若干具体的であることがうかがえる。しかし、2回目にはその違いはほとんど認められない。今回の乳幼児とのふれ合い体験の効果をここにも読み取ることができよう。次に、項目別に1回目と2回目の違いを検討してみたい。「戸惑った」の1回目の記述は、今まで乳幼児とふれ合う経験のほとんど無い学生たちの戸惑いが率直に述べられている。ふれ合う対象である乳幼児自体についての知識不足と、その対象とかわろうとするときの自分の対応の仕方が分からないことから来る不安がうかがえる。生後11ヶ月児を抱き上げた際の「あまりに軟らかく不安定で、どこを持ったらいいのかわからず戸惑った」は、赤ん坊を抱く機会のなかった者の素直な感想といえる。2回目には、学生が授業を通して学んだ子どもに対する理解に基づいて、ある程度の予測を立てて臨んだと思われるが、その予測が実際の子どもの行動とズレていたための戸惑いがうかがえる。「驚いた」についての記述は、様々の側面を含んでいる。1回目は、一人ひとりの個性や発達の個人差を目の当たりにしたこと、子どもの好奇心の強さ、1歳前の子どもでも自ら主体的に環境の中から選び取って遊びを見いだしていく姿などに驚いている。また、子どもはお喋りするもの、笑わせたらすぐに笑うもの等の子どもに対する学生の思い込みと、目の前にいる子どもの姿とのギャップに気づいて驚いた者もいる。2回目は、3ヶ月間の子どもの成長の速さや、子どもが主体的に環境とかわかることに対して改めて驚いたことを記述した者が多い。「嬉しかった」の1回目は、子どもが自分にモノを差し出したり抱っこして欲しい様子を見せたときなど、子どもが自分に発信した状況を挙げた者が多い。2回目は1回目とほとんど同じであり、子どもとのかかわりが成立したことを嬉しいと捉えていて多様性は少ない。「楽しかった」の1回目は、子どもの行動を観ること自体が楽しく、その子どもの生きている世界に想いを馳せることも楽しんでいる様子である。2回目には、さらにそこから発展させて、自分が保育者だったらどういう保育をしようかと楽しく想像している学生もいる。この項目も記述の拡がりは少なく一様であるといえる。「困った」は、1回目には子どもの反

応が得られない時やかかわり方が分からない時などの記述が多く、「戸惑った」と共通する部分が多い。2 回目には、授業で保育実践事例に基づいて学んだ後であるので、自分のかかわり方についての反省や、困った状況について自らの子どもへのかかわり方の工夫の面から捉え直そうとする姿勢もうかがえる。

記述量は総じて「自己自身」は 1 回目が多く、「気づきや新たな発見」は 2 回目が多い。

「気づきや新たな発見について」の 1 回目は、異世代間の交流が乏しい現状を反映して乳幼児を目の前にしたときの「困惑」や素朴な「驚き」を述べ、その一方で見ているだけで十分に「楽しい」と捉えている。その結果として「子どもについてもっと知りたい」という動機付けが生じているといえるようである。また、言葉による関係成立以前の発達段階にある子ども(1 歳児)を目の前にして、容易にはコミュニケーションが成立しない状況に戸惑うとともに、子どもに寄り添う姿勢の大切さについての気づきが導かれている。2 回目は、前回のふれ合い体験から 3 ヶ月が経過したことによる子どもの成長の速さを実感するとともに、ある種の見通しや仮説を持って臨んでおり、前回よりも多少の理解をもとに対象児とふれ合うことにより、乳幼児でも個性を持っていることや様々な能力を持っていることを見逃さず捉えることができている。また、頭の中の知識と目の前の子どもの対応とのギャップを改めて感じ、子どもの目線で周囲を見ることの重要性に気づき、努力している。さらに、それまでは何気なく見ていた子どもの行動を知識と照合することによって理解の深まりを導いている。例えば、子どもの母親への愛着行動の実際の姿を観察して、子どもの発達にとっての意味について認識を深めた者もいる。そして、子どもに対する理解は、さらにその先にある子どもが育つ環境についても想いを巡らせることになる。授業の中で乳児院見学を行い、そこで学んだことと照合していることは、乳児院の子どもたちに対する理解を促す効果もたらしているといえよう。

したがって 2 回目は「ふれ合い体験」を総体として受けとめて、幅広い視点を持つことにより、子どもに対する理解は深まったといえるだろう。中学・高校の家庭科教員を対象にした調査では、家庭科保育領域において生徒に教えておきたい内容は育児の方法や発達の数値よりも、人間としての命の尊厳やおとなへの育ててくれたことへの感謝など精神的な人間としての立場を理解することであったという(室 1999)。本研究結果は、この保育教育の目指すところとおおよそ合致していると思われる。しかし前述のように、乳幼児との接触体験は生徒の情意面の効果はあるもの子どもに対する理解についての効果は乏しいという報告がある(中田・松村 1999)が、それは対象者の違いによる相違であると考えられるのではなかろうか。すなわち、本研究は大学生を対象としているため、中学生・高校生よりもより成熟した段階にあるので、省察することによる気づきや発見がより効果的に働いたのではないだろうか。また、情意面については、ほとんどの学生が 1 回目から「嬉しい」「楽しい」を強く肯定していて十分に達成しているために、ほとんど変化は見られない。それは彼ら彼女らが教育学部の学生であり『保育実践論』を自ら選んで履修している学生であるので、元来子どもや保育に関心がある学生であるという要因が考えられよう。また、今回の資料は、男子学生は 1 名のみであり性による偏りがある。この男子学生(No.12)は「現在乳

幼児とふれ合う機会が週 1-2 回有り」で、本学卒業後幼稚園教諭に就いていることから、彼の資料は男子学生一般に当てはめることは適当ではないだろう。したがって、男子学生と女子学生の間に違いがあるかについては、今後対象学生数を増やしてさらに検討する必要がある。また、本結果からは、子どもに対する理解は、まずは情意面で十分に達成された後に、それを基に子どもに関する正確な知識を目の前にいる子どもと照合することによって深まる、という段階的な深まりがあることが示唆される。しかしこの点は更なる検証のための研究が必要であり、今後の課題としたい。

本研究から、「乳幼児とのふれ合い体験」は子どもの行動を観察し自分のかかわり方を顧みることを通して、子どもに寄り添って子どもの目線に立ち、子どもが生きている世界を読み取ろうとする姿勢や、様々な側面から子どもを理解し、さらに広い視野で子どもを取り巻く環境の重要性についてまでも理解を促したといえると思われる。

文献

- 伊藤葉子, 武藤八重子, 1987, 保育領域における情意の指導と評価(第 2 報)―子どものイメージ, 日本家庭科教育学会誌, 30(1), pp.67-72
- 文部省, 1999, 第 2 章 第 9 節家庭, 高等学校学習指導要領, p.131
- 文部省, 1999, 第 2 章 第 9 節家庭, 高等学校学習指導要領, p.136
- 文部省, 2000, 少子化と教育について(中央教育審議会報告), p.19
- 室雅子, 1999, 中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割, 家庭教育研究所紀要,113, pp.75-105
- 中田佳代子, 松村京子, 1999, 乳幼児の発達に関するコンピュータ映像教材の開発(第 1 報), 日本家庭科教育学会誌, 42(1), pp.23-28
- 岡野雅子, 1997, 異世代に対する子どもの関心と理解―子どもにとっての高齢者の意味―, 日本家政学会誌, 48(1), pp.71-80
- 岡野雅子, 2003a, 青年期女子の子どもに対するイメージ―彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連―, 日本家庭科教育学会誌, 46(1), pp.3-13
- 岡野雅子, 2003b, 子どもに対するイメージ―女子学生と幼稚園児母親との比較と保育教育への示唆―, 信州大学教育学部紀要, 110, pp.57-67
- 岡野雅子, 宮澤愛, 赤塚みのり, 2005, 高等学校家庭科「保育領域」についての現状と課題, 信州大学教育学部紀要, 114, pp.13-24
- 大路雅子, 松村京子, 1998, 雑誌掲載事例にみる中学・高校生の乳幼児体験学習の効果と問題点, 家庭科教育学会誌, 41(1), pp.55-62
- 藤後悦子, 2001, 高校「保育」体験学習を通じての子どもイメージの変化, 家庭教育研究所紀要, 23, pp.108-118
- 藤後悦子, 2004, 家庭科「保育」研究における動向, 日本家庭科教育学会誌, 47(2), pp.106-115
- 読売新聞, 2001, 学校に赤ちゃんが来る! 親子の触れ合い観察, 生徒も抱っこ, 平成 13 年 9 月 8 日記事

(2005年4月30日 受付)
(2005年9月 6日 受理)